阿川弘之

# 舷燈

昭和41年10月15日　第1刷發行
昭和41年12月10日　第2刷發行

著者　阿川弘之

發行者　野間省一

發行所　株式會社講談社

東京都文京區音羽町3の19
電話　東京（942）1111（大代表）
振替　東京 3930

印刷・製本所　圖書印刷株式會社

定價　490圓

© Hiroyuki Agawa 1966
Printed in Japan
落丁本・亂丁本はおとりかえいたします。

# 舷燈

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 第一章

## 一

静かな年の暮の晩であつた。

四人の家族は、居間に集つてテレビを見てゐた。

古い自分用の木椅子に夫の牧野が掛け、彼の右手の籐の小椅子に編物を手にした妻のかやが坐つてゐる。

小學校六年生の男の子と、四年生の女の子と、二人の兄妹は、プラモデルや着せ替へ人形の

散らかつた床の上にぢかに坐つて、思ひ思ひの姿勢で、遊び道具を忘れ、飾り棚の上の小型テレビに視線を集中させてゐる。

番組は大晦日の夜の恆例の、男女紅白の組に分れた歌合戰で、ブラウン管の上から一人の歌手が消えると、司會者が賑かに何か言つて、次の人氣歌手がまた賑かにあらはれて來る。

子供たちは父親が話しかけても、

「え？」

と、上の空でしか返事をしない。

かやも、テレビの畫面に惹き込まれてゐるしるしに、編物の毛絲針が少しも動かない。

電話器の上には、未だ何も書き込みの無い、明日からの新しいカレンダーが掛つてゐる。

居間の隅では、石油ストーヴが青い炎を靜かに立てて燃えてゐて、部屋は暖く、外氣のつめたさは分らない。

家族は此の四人のほかにいま一人ゐて、其の二年三ヶ月の末つ子は、もう別室で眠つてゐた。

牧野は、妻や子供たちのやうに歌合戰にそんなに夢中にはなれない。大體、テレビといふものにあまり興味が無い。

今夜はしかし、いい加減でもうスイッチを切れと言ふ氣は彼はしなかつた。年内の書き物の

仕事は全部片づいて、歌合戰を樂しんでゐる妻や子と一緒に默つて坐つてゐれば、穩かな、くつろいだ氣持に浸る事が出來た。

ただ、テレビの畫面の變り目か、遠いサイレンの音を聞く時か、彼の意識の裏にふつと顏を出すものがある。

此處は東京の町中で、一つ先の都電の停留所のわきに消防署があつた。其處から出動する救急車のそれらしいサイレンの遠い音を、さつきから二度ばかり牧野は耳にとめてゐた。

其の事はもう考へても仕方の無い話で、彼はちよつと首を振つてそれを追ひ拂はうとするが、完全には追ひ拂ふ事が出來ない。

妻のかやは、二週間前に病院で、四人目の——正確にいふと五人目の子を墮ろして來たのであつた。

始末をする決心をし、さうするやうにかやに命じたのは牧野だが、それにも拘らず、或は其の故に、彼には自分でも意外なほどの迷ひがあとに殘つてゐた。

世間の人が日常茶飯事と心得てゐるやうには、彼はそれを平氣で考へる事が出來なかつた。

墮胎についての人の話や雜誌の記事が、すぐ眼につく。それは、痔を病んでゐる者が、痔の藥の廣告にすぐ眼をとめるのと似てゐた。

三ヶ月目に入つた胎兒は、既にちやんと兩眼を具へてゐるさうだとか、產婦人科醫が搔き出

したものの後始末を一手に引受けてゐる會社が東京にあつて、何處かの寺に其の會社の建てた供養塔があり、いつもミルク瓶が供へてあるさうだとか、また、奈良のある坊さんの語つたといふ、

「今の時代が人命尊重の時代だなぞとは甚だ僭越の沙汰で、年々何十萬人の赤兒を陽の目を見せずに殺しておいて、口を拭つて何が人命尊重か」

そんな言葉とかが、始終眼につき耳についた。

男、女、男、女の順で、始末した子はきつと女であつたやうな氣が彼はしてゐる。あの儘であれば、年が明けて來年の夏、其の女の子は生れて來る筈であつた。

それから十年經つと、十年といふのは戰後の牧野の感覺では實に短い時間なのだが、今其處の敷物の上に坐つて、大きな眼をしてテレビを見つめてゐる加代子のやうな、スカートをはいて、お下げの髪に紫のリボンを結つてもらつた、日向くさい一人の少女の姿になる。さうなる者の道を、自分が自分の意志で閉ぢた。

其所まで想像すると牧野は、ちよつと聲が出さうになり、それで反射的に首を横に振つて、別の事を考へるやうにする。

ブラウン管の上では賑かに、歌合戰がつづいてゐた。

壁の時計は十一時を大分まはつてゐる。あと暫くで其の針が重つて、年が變る。

長かつた貧窮時代の名殘と、一つには牧野のものぐさ乃至天邪鬼とで、新年が來ても、彼の家庭では殆ど何もしないし、殊に彼自身には特別の感慨は何も無いのだが、年齢を滿で數へる戰後の習慣に馴染めない彼は、又一つ齢を取るのかと、それだけは思ふのである。

明けて、昔流に彼は四十五になる。

戰爭が終つた時、牧野は二十六歳、軍隊で外地にゐた。それから十八年經つた。

其の十八年の間に、彼の父が亡くなり、母が亡くなり、彼は結婚して家庭を作つた。

家庭といふのは、考へてみると不思議なものだ。

それが夫と妻の二人で成り立つてゐる間は、ちつとも不思議ではないが、子供が出來ると、一種、不思議なものになる。

偶々の二人の男女の結びつきから、それ以外の組合せでは決して其のかたちをなさなかつたものが生れて來る。

彼は、自分があの戰爭で死んでゐたらと考へる事がよくあつた。

彼の仕事机の抽斗の中に、「兵豫二期會名簿」といふ、軍隊のクラス會名簿がある。

其の後半は戰死者の頁で、四分隊、誰、十八年十一月二十五日、ソロモン群島。二分隊、誰、十九年六月十四日、中部太平洋方面。誰、二十年八月六日、廣島。誰、同年三月十四日、硫黄島。誰、十九年十一月五日、比島海域。誰、同年五月三日、ニューギニヤ方面。名は蜿蜒

とつづき、忘れた顔もあり、忘れない顔もあり、なつかしい顔も、生きてゐたら唾してやりたいやうな、いやな記憶につながる顔もあるが、此の活字の行列の中に牧野自身の名前が入つてゐないのは、ほんの偶然の事としか彼には考へられない。それは、殆ど自分の意志を働かせ得る範圍の外の事に屬してゐた。

娘であつたかやは、現在の夫である牧野が、もし死んでゐても、其の名前くらゐは二人の仲立ちをしてくれたT夫人の口から、何時か聞く事があつたかも知れない。

「昔、よくうちに遊びに來てゐた文學青年で、牧野さんといふ人がゐたのよ」

「……」

「生きてゐたら、今頃何かものを書いてゐたかも知れないけど、戰死したの、其の人」

「まあ」

しかし彼女は、それが牧野であつたか牧田であつたか、すぐ忘れ、やがて緣があつて誰かに嫁いで、今よりは少くとも苦勞の少い、氣樂な、誰かの母親になつてゐたであらう。

さうなつてゐても少しも不思議は無かつたし、其の想像は牧野にとつて特に不愉快な部分も無かつた。妻の場合はそれでいいだらう。だが、其處に坐つてゐる二人の子供と、別室で眠つてゐる幼兒とは、偶然が自分をあの活字の列の中へ送り込んでゐたら、決して世にあらはれて來なかつた者たちで、それを考へると牧野は不思議な氣がするのである。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

そして、自分にあんな決定をする權利があつたのだらうかと考へる。

小學校六年の亨の背丈は、もう其の母親よりも、死んだ祖母よりも高くなつてゐた。結婚後まる十四年經つて、かやの髪には少し白髪が見え始めてゐる。

牧野は、此の大晦日の晩、子供たちにも妻にもやさしくしてやりたいやうな、感傷的な思ひになりかけてゐた。

テレビに夢中になつてゐるから、今は忘れてゐるのだらうが、墮ろした子供の事を話題にするとかやは、

「わたし、魔がさしたとしか思へない。前の時は、そりや暮しが苦しかつたし、二番目と三番目がすぐつづいて仕方がなかつたと思ふけれど、今度はさうぢやないんだから、あなたにだつてそんなに未練がおありになるんなら、わたしがもつと強く反對すればよかつた。どうしても生むと言つて、反對すればよかつた」

すぐさう言つて泣く。

しかし、お前の責任ではない。夫の意志に強く逆らふといふ事は、お前の習慣の中からは、もう殆ど消えてゐる。

默つて、同じテレビの畫面を見ながら、牧野は、かやが長い間自分によく從つて來てくれたといふ事を考へてゐた。

もし自分が、あの活字の列に入りそこなつてから十八年の今、自分の生涯を此處で閉ぢるとしたら、きつと自分はかやにさう言ふだらうと思ふ。

お前は俺にとつて立派な妻になつてくれた。立派といふのは、賢くてしつかりしてゐる意味ではない。少しも堂々としない、影のやうに目立たない、さういふいい奥さんになつてくれた。俺は、お前といふ者がゐて倖せだつた。女の、虚榮、出しやばり、亭主の仕事への口出し、嘘、權謀術數ともいへぬ女らしい世間智の小細工、他人への嫉視——、自分は極度に嫌ひだつた。もしそれが、女といふものの屬性だといふなら、そんなものが常住身邊に居据つてゐられる事に、自分は耐へられまいと思つてゐた——。

其の種の事で、かやが牧野の神經にさはる態度を採るためしは、しかし殆どもう無くなつたと、彼は思つてゐる。

時々かやは、夫の様子を見ながら、少し冗談めかして、

「きびしく、きびしく、そんな風に言はれて、わたしばつかり悪いところが消えてしまつて、綺麗な佛さまのやうになつちやつたら、却つて御主人様の方が困らない？」

と、笑つて言ふ事がある。

「小さな齒車と大きな齒車とが一緒に廻つてゐて、小さい齒車の方は悪いところだらけだから、無論直すやうにしますけど、大きい齒車にもやつぱり缺點だつてあるんでせう？　お互ひ

に少しづつ、とんがつた所を削り合つてといふ風にはして頂けないのか知らねえ」

「さういふ言ひ方をするな」

と、牧野は答へる。

「俺は、自分が缺點の無い人間だなどと少しも思つてゐはしない。どちらかと言へば缺點だらけだらう。しかしそれに關しては、お前の世話にならない。對お前といふ者の範圍内では、齒車を削る役目はお前だけなんだ。佛様のやうになんかなるもんか。死ぬまで、とんがつた所だらけだから、教へて欲しければいくらでも教へてやる」

結婚して十四年間、言葉の調子はちがつても、ともかく牧野はさう答へつづけ、それで押し通して來た。

言葉で答へるだけでなく、蟲の居どころが惡いと、妻のさういふ言ひ方に我慢がならなくなり、いきり立つて何度も暴力で仕返しをした。

しかし、其のやうな仕打ちも、そんな問答も、今ではずゐぶん間遠になつたと、牧野は妻へのいたはりの思ひをこめて考へてゐた。

## 二

テレビの畫面に雙生兒の女の歌手があらはれて、キビキビした調子で歌つてゐる。
右の子を鏡で左へ映したやうに、二人の顔かたちは不思議なくらゐよく似てゐた。
「ザ・ピーナッツも、久しぶりに見ると大人つぽくなつたな」
と、牧野はテーブルの下へ足を投げ出しながら、口を出した。
「僕はだけどやつぱり好きだよ、此の二人」
「……」
かやは黙つてゐる。
其の黙し方にはしかし、ある感じがあつた。彼女は黙つて、さりげなく毛絲針を動かし始めた。
牧野はふと、裏切られたやうな氣がした。
急に自分の氣持が意地惡くうづき出すのを意識しながら、彼は、
「え？　どうかね？」
と、意地の惡い調子で、强ひて妻の返答を求めた。

「僕は好きだがね、ザ・ピーナッツ。お前、どうだい？」

「きらひです」

妻は、上ずつた聲を出した。

それは、今の今まで牧野がいたはりの思ひで感傷的に心の中に描いてゐたかやとは、よほど違つてゐた。

彼は妻の顔を見た。

「何故？」

「白痴的な感じがするもの」

「おい」牧野は、伸ばしてゐた足を元へ戻して、立ち上りさうになつた。「いくら見知らぬ歌うたひの事でも、さういふ侮蔑的な言ひ方をするのは、よせ」

「……」

「え？」

「……」

「俺の言ふ事の意味が、分らないか？」

「分りますけど、だつて、ピーナッツがテレビに出たら、あなたは何時だつて仰有るんですよ。俺は好きだ。好きだ、好きだ、好きだ」

大袈裟にヒステリックに言ふなり、かやの顔は見る見る醜く歪んで來た。それを正確に反射して、牧野の顔も不快に歪んで來た。

「好き嫌ひはお互ひの勝手だ。しかし、お前の言つてゐる事はさうぢやない」

「……」

「要するに、下らない馬鹿々々しいやきもちぢやないか。俺と此の雙た子の歌手とは、知り合ひでも何でも無い。會つた事も無い。前に好きだと言つた事があるかどうか覺えてないが、好きだといつても、外國の映畫俳優が好きだといふのと同じ程度の問題だ」

「……」

「それを、何だつてさういふはしたない言ひ方をする？」

「……」

「ええ、おい」

「惡かつたら、謝ります」

「惡かつたら、といふ事があるか」

「……」

「惡いよ。はつきり惡い」

「……」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.